

■■ 山の彼方 ■■

I

私としては、まだほんの子供の頃のことだったが、よく記憶にある。ある日前の川に魚を掬いに出た男が、おりからの出水に足を攫われて流された。そうして網だけが後に残って死体は遂に発見されなかった。まだ一七か八の青年であった。その父親が悲嘆のあまり一時は腑抜けのようだと噂もあった。毎日家を出て山から山をさ迷って歩く。後になって当人の語ったところでは、当時は家にいても、ひょっと倅が裏の山からでも出てくるか、樹陰から覗いてでもいるように思えてならなかったと言う。もちろん生きているとは信じなかったろうが、そう言って溺れた現状を見ておらぬ限り、諦め切れぬものがあったろうと思う。

それにしても、現在川に溺れた者が、裏の山にきていると思われたのは、単純な心神の迷いとしても、何らかの理由の潜むものがあったはずである。私がこの話をする目的も実はそれであった。ちなみに私の郷里というのは、愛知県もぐっと東寄りの、横山（南設楽郡長篠村）という、片田舎の部落である。

II

川に奪われた倅との邂逅を、山に期待したのも、おそらく当人だけの思いつきではなかった。そう信じさせ迷わせた掘り処はあったのだ。その第一は、行方の知れぬ者または死んだであろう人に、邂逅したという話も世間には多かった。寺の門前などの人の雑踏する中で見かけたとか、摺れちがいざまに気がついたが、確かにあの人であったなどの事実は、そちこちに語られていた。次には邂逅した場所を山とする例も案外多い。現に同じ村の話で、隣村の某は、朝家を出る時は町に買い物に行くと語ったが、それなり行方が判らなかった。何年かの後に村の者が秋葉山（静岡県）に参詣に往くと、本堂の前を駆け降りる姿をちらっと見た。たしかにその人であった。また村のある貧しい家の子供が、物持ちの子と一緒に抱き合っって川に溺れた。これは死体は上がったが、どういうものか二人が氏神の山で遊んでいるなどと噂した。こうした類の話は汎い世間にはまだ何程でもあったらしい。

山国などで、唐突に姿を隠した者がやがて探し索められる先はほとんど山であったのは、地理的条件から当然ではあったが、還ってから語るところが、一致して山に誘うものがあったことを語っていた。こうして、還って来たから神隠し、天狗に連れられたといい、あるいは狐狸の類に訛されたともいったのだが、この理法からいうと、永久に還らなかったものもまだどこかの山の奥にでもいると、家郷の者が信じたのも無理ではない。生きている

と思えば、どうだかと首を傾げるような消息も齎された。

Ⅲ

亡くなられた佐々木喜善さんの書き留められたもの（『東奥異聞』『遠野物語』等）には、たまたま山に入って思いがけず何年か前に世を去った人の声を聞き、現わに姿を見かけたというのが幾つかある。これは結局靈魂と解するほかはなかった。そうしてその消息を伝えた者が、山仕事携わる者の中でもことに狩人が多かったのは、別に理由があろう。越中の立山の地獄の話なども、語られていた地域は案外に広がったようだ。近江愛知郡の大領という者の娘が、立山の地獄の苦しみを山伏を通じて家郷に訴えた話は、平康頼の著という『宝物集』等にもあって有名である。あるいはそこに願えば、思う人の靈が影の如く現れるという（『諸国俚人談』三）。愛し児を失った親が、立山を訪れて、あたかも樹梢で語るその子の口から、応報の恐ろしい因縁を聞かされたという譚は、かつて私の幼い心に異常の感動を与えたものであった。（『三州横山話』参照）

南部恐山の地獄極楽の話も有名で、死んだ人は必ずそこを訪れるとは、まさに越中の立山と同じであった。その他いわゆる名山、靈山ならずとも諸国の山には多少とも人間の立ち入ることの憚られる境地があった。神域とか聖地等という窮屈な觀念とも少しちがう。

くらやみ
地獄谷、暗闇谷、鬼の洞、天狗森等という地名の由来にも、幾分その間に交渉があったろう。いわゆる賽の河原、西院の河原なる地がまたその類で、島とか海辺などでは岬の端や岩窟などに説かれていたが、山地では山の嶺とか中腹または狭間等の尋常ならざる地相に多かった。世を去った子供たちの靈魂が夜毎に集まって小石を積むと説かれた一方に、すべての死者の行くべき先であったとも言う。さらにそこには子授け、子育ての神ないし仏が祀られてあったことも注意せられた。

Ⅳ

山のあるものには、深夜に鶏の声を聞くことがあるという。いわゆる金鶏伝説の一型であるほど各地に行われている。そうしてその声を聞いた者は幸福を得ると説く反面に、死の予兆とするところもある。鶏の声は今日の社会ではもはや大した感動も誘わないが、かつて夜の暗黒をかこった時代には異常な印象を与えたものである。ことに遠方の部落等から闇を透して響くものは、その地の存在を示すものであった。その他深夜に山中で人の叫びを聞き、または異人に遭遇する等のことがやがて死の前兆であり幸運の暗示であるとするのも、別個の世界との交渉を前提としての話ではなかったろうか。土佐の土佐郡本川村の奥の山には、ヘイケという谷があり、そこには黄金の幣帛が立っていて、これを見るこ

とは死の予告であると、これは昨年その山を歩きつつ聞いた。これに似た語は、遠州周智郡の山中にもあった。（『遠州奇談』）。しかしそこでは死との関係談はなかった。

V

山の彼方の世界との交渉は、実は近ごろにおいてもまだ強い執着をもってつづけられていた土地があった。正月の神をそこから迎え、盆の精霊を導くと同時に、なお別のものを迎えていた。

妊婦が産気づいて久しく苦しむがっこう産まれないのに、山口に向かって馬を牽いて行く。これは山の神をお迎え申すので、途中で馬が身震いするか、または耳元をブルツとさせると、すでに神が乗られたと解して馬首を回す。帰るともう勇ましい赤子の声がしている。これは佐々木喜善さんの郷里、陸中遠野の話である。

産の神としての山の神は、水の神の信仰と平行して日本の津々浦々に及んでいる。その祈願の方法として、人形、枕、産衣、腹帯の類から、食物である団子、餅、赤飯、その他串、薪と思われるもの、石の類を供える等、形式はいくらでもあった。これらの風俗の動機は、山の神そのものを一種の産婆役と解したことから出ていたろうか。もちろん出産は女性の大役であり苦艱の経験であったと同時に、生まれ出ずる者の幸運を希う心も切実であったから、自ずとそこに重点の移る傾向があったのは自然であろう。しかし結果から、そこに寄進された物品を通して観るとき、それと報償的に授与されるであろうものに大きな期待があった。たとえば出産のまじないとして、神の社から迎えた燈火をかかげ、人形枕の類を産室に飾り、布片や供物の団子、小石の類を枕の下に敷きまたは腕に抱いたのは、神または神の象徴を迎えると同じ意味で、その神から齎されるものの勝れてめでたからんことであった。

VI

旅の六部が行き暮れてある大樹の陰に宿を借りると、深夜ジャンジャンと馬の鈴の音がして近づく者がある。御同役参ろうという。今夜は大切な客人があつて手が抜けぬからよろしく頼むという。それではと立ち去ってから、間もなく前の声で、今帰った、一方は男で乞食の運、片方は女で長者の運と語り、あるいは無常は火とか水とか告げる。翌朝六部が里を訪れると、果して前夜聞いたことに符号する男女二人の誕生があつた。この説話には、談合を聴く主人公が山伏とか狩人、旅僧であり、子供の方の親である形式もある。声の主が賽の神と山の神、または産土神とか地藏尊等の場合もあるが、要するに男女の縁をはじめ、延いては生涯の運命が、同時に神の手から付与されることの説明であつた。あるいはこれが例の竈神も由来譚の発端ともなっている。ここにもまた山の神が有力なる関

与者であった。ことに沖縄の島々に語られたものは、談合の神の一方を寄木の神となしたのは意味がある。

VII

夜な夜な娘のもとに通う男が、山々の洞穴の奥や、その他、淵、池、祠の下等に棲む異類である伝説も、三輪山神婚譚以来豊後祖母ヶ嶽の蛇婚譚を初めむしろありふれている。異類を父として誕生する神または勇士を説く反面には、異類たることによって、誕生を未然に防ぐ形式も多い。「もう人間の許に胤を遺して来たから死んでも悔いはない」これは針を体に刺されて悶えている者の声である。「いやいや人間は賢い者故、五月節句の朝、菖蒲で湯を立てて浴びたら墮りてしまう」と一方が語っている。その私語を耳にして急いで帰り、その言の如くなしたら、果して盥に何杯かの降り物がして、異類の胤は遂に征服せられる。こういう動機から、山の洞穴、池淵の底にあるものと人間との交渉は絶たれて行った。これも前話と同じく、人間の誕生に山または淵の底にあるであろう世界が、重要な関与をなしていたことの記憶を語っている。しかも異類と知ってにわかにかんがひ恐怖を感じたのは、言い換えればかつて崇敬し服従した他界よりの来臨者に対する反逆であって、信仰意識から言うと神に対する理解の消亡でもあった。これはあたかも水の神またはその象徴であった河童が、後に人間の厭忌に触れて袂を別ったのと軌を一にしたものであった。しかしそうした信仰変化の反面にはなお山の獣である狼、熊、鹿、猪、猿、狐の類から、蛇、蜘蛛、蝦蟆をはじめ、あめのうお鰻、鮭、鯨魚、堀亀も、時と所によってこれを神とした神の化身と解するだけの意識を持ち合わせたのは不思議である。虚空を翔る鳥に神威を感じ、あるいはそれを持って霊の象徴とするかつての記憶をも、何らかの形にのこして、まったく忘れてはいなかった。

われわれ民族の有する最高の神話では、水底における魚の世界と交通し、そこと婚姻が行われることを説いている。その一方には山の彼方に棲む異類との交渉があったのだ。しかしてそれらは一様に、人間界では美しい容姿を具えていながらその本拠では異類の形をとっている。伝説のいわゆる本地であった。諏訪神の本地を蛇とし、山王神社を猿とする説も、その神ばかりの特例ではなかった。

今日もなおいう民族で、獣のある者が人間の姿に化けるという思想なども、この神話の事実を基礎とせぬ限りおそらく解き難い謎であった。

VIII

狩人が山中または洞穴を訪れる譚がある。たまたま一軒の家があって、美しい女性が機を

織り、あるいは麻を績ぐ老女を見る。怪しんで女を覗いたが手応えがない。最後に、黄金の玉をもって撃つと、たちまち家も女も掻き消えてしまった。または猫、狼、狐の劫を経た者が斃れていたという。この譚には多分に他話の混淆と一方に忘却があるらしいが、例の甲賀三郎の人穴巡り譚等に縁を引くもので、霊男または他界交通譚の残片と観られ、その庇護と援助を説くことに本義があるように思う。この想像が正しいとすれば、たまたま妖怪退治に中心が移ったために、他界を語る点はまったくの景物に化してしまったが、動物が人間の形をもって存在したことはありふれてはいるが類型への交渉点を失っていなかった。夜陰に狐の館の難産に立会い、または金瘡を療治した等の話は、今日はむしろ笑話として扱われる程度であるが、これが多く医術に関連して説かれていたのは、やはり河童の秘法明しの物語等とも連絡が考えられ、また一種の他界交通交易話であった。しかして『遠野物語』にいうマヨイガの類から、山伏の報恩、山姥のオツクネ、粉袋の奇瑞にも続くもので、他界ないし異類交通と財貨の獲得幸運庇護の関係を語るものであったと思う。

同じ他界観念にあるものでも、いわゆる隠れ里、仙界譚の類には、多分に仏教的色彩が加味されていた。平家谷伝説なども、残党の子孫がそこに余生を送ると解したのは、おそらく後の合理説で、小泉八雲が怪談集にいう耳なし芳市の招かれた世界であり、あるいは『雨月物語』にいう、伊勢の俳人夢然が、高野山中の霊廟で遭遇した、秀次の亡霊と同じである。熊野の海に投じた維盛が、那智の奥の藤館または藤宿に一族と隠れ住むと説かれたのも、格別不思議でない。名は同じながら実は子孫であった等と説く方が、かえって根拠のない臆説であった。山の彼方に他界の存在を肯定すれば、平家の一統も、義経主従も、または曾我兄弟の生存余地もあった。さらに八百比丘尼、常陸坊、前筑庄の浦の仙女の長寿が、そこに交渉を持つことによって、承認されたのも当然であった。

IX

話がいささか逆戻りの感があるが、他界交通を別個の側から観ることとする。次の話は妻が臨月にある者は、狩りは慎むものとの教戒譚として、私が少年時代耳にしたものであ

る。もちろん類型は多かつた。三河八名郡宇里やなの某狩人が、朝早く石巻山にゆき崖の下で鹿を待っていると、突然崖の上から一頭の鹿が転げ落ちた。驚いて上を仰ぐと、あたかも一匹の大蛇が上から首を差し出して覗き込んでいる。それを見て夢中で鉄砲を打ちかけると、蛇はずるずると手繰るよう落ちてきた。そのまま後も見ずに帰って来た。家ではあたかも臨月の女房が今しがた産の紐を解いたところであった。大蛇を撃った時刻と、誕生とがあまりに時間が符号する。それで恐ろしくなって以来渡世を更めたというので、後日

譚はなかった。狩人の翻意の根拠は、靈魂の授受が人と動物の間に行われる事実の認識にあった。他界交渉は後には因果関係を絡んで、こうした形にも説かれた。一方に乞食が瀕死の境にあり、他方御殿の産室では、難産を訴えている。乞食の命を絶つとともに、めでたい誕生を説く譚と同じ形式であった。

X

山から、あるいは洞穴の奥等から、靈魂を齋らすのでなくて、現に人間の姿をもって出て来たと伝えられる者も幾人かある。足柄山の金太郎、浅間ヶ岳の怪童丸の類がそれであった。ともに動物の熊、鹿、猿とともに育って来た。怪力猛勇の士の誕生を説くためには、おそろしく古い思想をも必要とした。その一方には、異類、異生の胎内から孤々の声を上げた女性も幾人かあった。肥前（柳島郡）福泉寺の縁起によると、和泉式部は、寺の境内近くに棲む猪から生まれた（『太宰管内誌』）。光明皇后の御前身は開聞神社（薩摩揖宿郡）の縁起では、その昔塩土翁が加治の法水を鹿が舐めて妊り給うた（『三国名勝図会』）。東海道矢作の長者の愛娘浄瑠璃は、鳳来寺の岩窟に修法中の、利修仙人の小水を鹿が舐めて生み落した。あるいは光明皇后という。（『三州鳳来寺寺記』）。ともに才色凡俗に超越した女性で、しかも趾の爪が獣の如く裂けていたと説く。これらの伝説も才色凡超の女性を語るべき目的の下に、異常誕生の説の輸入附会とのみは断ぜられぬ。

山に赤子の泣く声を聞く説もすでに久しかった。あるいは足跡の残るといふ赤子石、その母親とする鬼女、山姥を説く譚もむしろありふれていた。鬼女、山姥は、人間界を捨ててそこにかくれた如くもっぱら説かれたのは、むしろ後の合理説で、オカミまたはオオカメの類の神獣が、里の犬が山中に紛れ込んだものと説くにひとしかった。人の姿をしてしかも異なるものの住家を、深山の奥に想像することも、何らの矛盾困難でなく極めて容易な順序であった。

X I

隠れ里といふ仙界という、いわゆる他界の消息は、そこに交通する限られた人々によって齋らされた。仙人、聖 ^{ひじり} などと言われた者も多分その一人であったが、偶然の機縁から、別個の方法が行われた。いわゆる神隠しがそれであった。隠すというから、そこには導き誘う者の存在を考えがちであるが、少なくとももとの形はそれを前提とはしなかったと思う。

神隠しの実例として、私などの知っている後世の事実から判断すると、その彷徨した世界は現世の中ではなかった。そこは明らかに時間、距離の観念においても、現世をはるか

に超越した世界であった。自在に虚空を翔破し、一瞬にして数十里数百里を移動し、そこではほんの一刻に過ぎなかった期間が、還って見ると、数十倍数百倍を経過している。たんにこれだけの事実でも、われわれ経験範囲では、夢でもない限り到底企及し難い。しかも偶然な事実は、神話、伝説に説く、地下の国、水の底の世界への交通を、現実^{うつしみ}に経験せるものであった。京を見物し金比羅に参詣したと言うても、その場合はすでに現身ではなかった。人間界の視野からは全く隠されてあって、肩を接し膝を交えていても、なお及び難い隔絶があったことになる。これを当事者について言えば、たとえばいわゆる狐とか天狗に訛かされたようなもので、それらの世界以外には、まったく視野を隠されているのが、本義と思われる。後にその現象に疑問を抱くようになり、これをもっぱら当事者の精神的現象と見るようになってから、いっそう複雑混淆して来たのではないだろうか。神隠しの経験者が、共通に語るところの、目かくしされたという事実等から言うても、その期間人間界との交渉は不可能であった。仮にそのまま人間界に現れても、あたかも地下の国から還ってきた甲賀三郎のように、容れられる余地は得られなかった。形を変ずることが、他界ないしは神の世界への交通の要点ではなかったろうか。

神隠しに対する周囲の者の処置の一つとして、カヤセといいモドセと叫んで、さらに当人の名を呼んだのは、私の郷里などで仮死の状態に陥った者に行う手段と同じで、これをカヤセ、モドセの語の現在の慣用例から、当人以外の存在に向かって発したものとも取れなかった。その他意味の判らぬことを叫んだのも、神の世界に呼びかける一種の呪言ではなかったろうか。あるいは鉦、太鼓を打ち、榊の尻とか当人使用の茶碗を叩き、櫛の歯によって音を立てたのも、これを誘導した者に対する示威策の如く考えたが、一面から言えば、肉眼をもっては透視し難い世界に対する、一種の通信法を応用せるものと解される。

X II

永久に里の生活の執着を断って、山に入った者は、何かの機会に消息があった。樹の陰から声を聞かせたとか、時には現わに茅の中から半身を見せた。したがってまだどこかの果てに生を営んでいると信ぜしめたのも不思議はない。しかしそれらは仮に発見されたとしても、「倭文麻環」にいう霧島山の雲居官蔵のように、還ることを肯じなかった。仮に還らんとしても、すでに帰られない事情にあることも判っていた。そこに入った者が、たちまちにして、性格を変じ、体質、嗜好を異にしたのも、単純に山地、自然から受ける修練と影響のみではなかった。たとえばか弱い女性の身で、数人の男子を持ってもなお止め難い力量を示しあるいは髪長く爪尖り、容貌は夜叉の如く変わったのもあった。薄を分け

岩を蹴って鹿などを追うこと平地を走るが如し、と説かれたのは、ともにもう現世の事実ではない。しかも一方には、大江山に誘拐された女たちのように、容姿も家郷への愛着も、何ら変わることはないが、到底脱出の叶わぬ、目に見えぬ束縛を感じていた。

こういう消息の伝えられたことは、残された者にはひとしおの寂漠と悔恨が恒に去らなかつた。そうして次々にそこに対する記憶を新たに喚び起すことを忘れなかつた。